

合気道史における海軍大将竹下勇の覚書『乾』、『坤』(1930-1931 年)の研究
A Historical Study of Admiral Isamu Takeshita's notebooks *Ken* and *Kon* (1930-1931) on Aikido History.

工藤龍太

早稲田大学スポーツ科学研究センター

Ryuta Kudo

Waseda University, Sport Science Research Center

キーワード: 植芝盛平、大東流合気柔術、合気道、柔術、技術史

Key words: Morihei Ueshiba, Daito-ryu-aiki-jujutsu, Aikido, Jujutsu, history of technique

抄 録

日本武道の一種目である合気道は、植芝盛平が大東流合気柔術を中心に数種の武術を修行し創始したものである。合気道史の研究において、その基盤形成期(1928-1940年頃)に植芝の武術技法がどの程度大東流の影響下にあったか、これまで技術史的な分析は行なわれていなかった。本研究は、植芝の経済的支援者であり、当時は合気武術等と呼称された植芝の武術技法を詳細に記録した海軍大将竹下勇が、当該期に記した覚書『乾』(収録技術数1634手)、『坤』(同1097手)について、その技術的特徴を明らかにする。

分析の結果、以下のことが明らかになった。『乾』、『坤』に記された当時の植芝の武術技法には、急所を狙う当身など実戦性・殺傷性を持つ技術が多く、それらは明確な大東流の影響を認めつつも、他流派の影響も若干かがわせた。両史料にみられる合計2731手の技術には、156の格闘形態があり、いずれも組んだ格闘形態がそれぞれの60%を超えて想定されていた。現在の合気道の標準とされる格闘形態数(34)と比較すると4倍を超える数である。また、裏手と呼ばれる105手の技術からは植芝が画一的な形稽古のみを指導していなかったことが判明した。

こうした合気武術の技術を支える武術論では、以下のことが明らかになった。技術的な面について、合気武術で力を用いる際には、地球の重力に逆らわない方向に用いること、力を分散させずに一方向に集中させ続けることが重要である。それを技術として端的に示すのが、一点一方向の力によって相手の姿勢を崩し、倒す当身技である。同時に、後の合気道指導者たちに「呼吸力」や「統一力」などの名で継承された呼吸と動きを合わせることによって生じる一種の集中力が重んじられていた。

精神的な面について、合気武術を学ぶには他流派と比較研究せず、師の教えに対して素直に学ぶ姿勢と反復練習が必要である。習得した技術は正当防衛以外に悪用せず、他人に合気武術の技術をみせてはならない。そして、日常生活全般に渡って油断を戒め、精神の力を軽視しなかった。そして、最大の練習成果を発揮するためにも、日々の健康管理にも注意を払っていた。これらはいずれも、真剣勝負の場で確実に勝利するためのものと理解された。

スポーツ科学研究, 12, 145-169, 2015年, 受付日:2014年8月25日, 受理日:2015年11月5日

連絡先:工藤龍太 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5 早稲田大学東伏見キャンパス内75号館2-202

E-mail: ryutak77@gmail.com

I. はじめに

植芝盛平(1883-1969、以下「植芝」)が古流柔術の一派である大東流柔術¹を中心に数種の武術を修行して創始した日本武道の一つである合気道の基盤が形成される時期²に、その普及に貢献した人物の一人に

海軍大将竹下勇(1869-1949、以下「竹下」)がいる³。竹下は、大正14(1925)年12月以降、植芝の武術を熱心に稽古するだけでなく、植芝の武術技法を各種史料に遺した⁴。その中に、合気道の基盤形成期に執筆された覚書『乾』、『坤』(以下、それぞれ『乾』、『坤』)があ

る。志々田が既に指摘しているように、両史料は「合気道揺籃期の植芝盛平の当時の技法の内容を克明に理解することが可能」⁵となるものである。

これまでの合気道史は、植芝の嗣子・吉祥丸(1921-1999)と植芝の弟子たちという合気道の実践者達を中心にして一般書籍の中で語られてきており、史料を用いた学術研究は極めて少ない⁶。志々田が既に指摘したように、合気道における組織の非統一が「資料の非公開という秘密主義を生み、客観的な歴史記述を阻害する」⁷ことになるからである。

従来の合気道史研究において未解決の問題の一つは、基盤形成期における植芝の武術技法が具体的にどのようなものであったかということである。これまで当該期の植芝の技法については、吉祥丸を含む弟子たちへのインタビューや、彼らの著した合気道の書籍の中で回想として語られるのみであり⁸、いずれも植芝が武道家として卓越した技法を持っていたことが窺えるものの、その具体的な実態についてはわからなかった。つまり『乾』、『坤』を分析することで、合気道の形成期における上述の問題についての技術史的な解明が期待でき、現在多くの流派が併存している合気道界において、その技術的な始原を求めることができる。

また、武道における技術史はこれまで柔道、剣道を中心に研究されてきた。『乾』、『坤』の内容の研究は従来の武道の技術史において未着手の分野であった合気道という種目における技術史を可能にするものである。国際化による技術的変容が避けられない現代の武道各種目にとって、その技術史研究は今後より必要なものとなると考えられる。

さらに、両史料の研究は、単に合気道という日本武道の一種目の研究に留まるのみでなく、近代以降の柔術の技術史研究の一事例となることも期待される。柔道創始者・嘉納治五郎(1860-1938)が1889年に行なった講演「柔道一斑並二其教育上ノ価値」による柔術の定義(「無手或は短き武器を持って無手或は武器を持って居る敵を攻撃し又は防御するの術」)を敷衍するならば、合気道という日本武道の一種目も、柔術という日本伝来の武術に包含されるからである⁹。

『乾』、『坤』について、Shishida(2008)は古武術研究者である故武藤正雄氏より提供された『乾』、『坤』の複写史料を解説し¹⁰、『坤』に記された「対柔道」という小見出しに着目し、柔道の古式の形(起倒流柔術の形)と

比較し、その関連性を考察した。筆者・志々田(2010)は、『乾』の中に「合気の事」と題された記述がある点に注目し、当時の植芝の合気が対峙した相手のバランスを崩すという技術的な意味で用いられていたことを明らかにした。また筆者(2013, pp.184-229)は『乾』、『坤』それぞれに収録されていた目次を活字化・再構成し、そこに記された植芝の武術技法の特徴を概観した。その結果、『乾』には66の格闘形態に1635手の技術が、『坤』には110の格闘形態に1096手の技術が収録されていることが明らかになった。しかし、あくまで両史料に記されたままの数を数えたのみで、重複する格闘形態を整理していない。また、現代の合気道や大東流の技術と比較してはおらず、後述する『乾』の冒頭部分や両史料の各所にみられる合気武術の武術論にも言及していない。

『乾』、『坤』の活字化は志々田や筆者の他にも、難波誠之氏を代表とする竹下勇ノート復刻委員会編による『合気術秘伝:乾之巻・坤之巻合本』が平成19(2007)年に自費出版の形で出版されている。膨大な量となる文字の活字化に取り組み、貴重な史料を一冊の書籍の形にまとめたことは意義あるものである。しかし同書には先述した『乾』冒頭部分の合気武術の武術論をはじめ数箇所が活字化されておらず、誤読、判読不明の箇所など、史料の扱いにおける過失が散見される¹¹。

以上を踏まえて、本研究では合気道の基盤形成期における技術的特徴を『乾』、『坤』の内容から明らかにすることを目的とする。考察の主眼は、合気道の基盤形成期において、植芝が大東流からの独立を志向していながらも、その武術技法はどの程度大東流合気柔術の影響を受けていたのかを技術史的観点から分析することにある¹²。

次章では、『乾』の史料的特徴(書誌情報)を述べる。次に、『乾』の冒頭部にある合気武術¹³の武術論についてみていく。合気武術の武術論は、執筆者である竹下自身のこれまでの修行体験と当時の植芝の教えから構築されたものであり、両史料にみられる合気武術の技術を支える精神性を示すものである。したがって合気武術の武術論の把握は、合気武術の技術を精神的側面からも考察することにつながり、本研究の課題にとっても有意義であると考えられる。そして、両史料に収録された技術を古流柔術研究者の富木の分析枠組みを用いて格闘形態ごとに分類し、現代の合気道との差

異を比較しつつ、その技術的特徴もみていく。Ⅲ章では『坤』を扱うが、『坤』には武術論が個別にまとまった形で記されていないため、格闘形態と技術的特徴について『乾』と同様に調査し、そしてその中に記述された武術論をみていく。

Ⅱ. 覚書『乾』

『乾』、『坤』は竹下の死後、経緯は不明であるが、神田の古本屋街で故武藤正雄氏により購入される。武藤氏から連絡を受けた現大東流合気柔術本部長・総務長である近藤勝之氏が一時管理し、複写史料化して現在に至っている¹⁴。

『乾』、『坤』は縦 15.6cm、横 20.3cm の四つ穴のルーブリーフに書かれており、縦 18.9cm、横 22cm のバインダーに収められている。『乾』は表紙を除いた 292 頁に渡って書かれており(途中白紙の 39 頁も含む)、表紙にはタイトルである「乾」の他に「自昭和五年春 至昭和六年冬」、執筆者である「竹下勇」の名が記されている。本文は全て竹下独特の崩し字で手書きされている。

1. 序文にみる合気武術の武術論

表紙に続いて「一、カノ入レ方」¹⁵(pp.1-3)、「一、研究者ノ心得」(pp.3-4)、「一、カノ用ヒ方」(p.4)、「武藝者ノ心得」(pp.6-7)、「呼吸大事ノ事(息ニアラズ)」(p.8)、「合気ノ事」(p.9)、「教導ノ心得」(p.10)と 7 項目に渡る記述がある。以下ではそれを順に示し、合気武術の武術論を考察する。なお、『乾』、『坤』において、仮名はほとんど片仮名が用いられているが、読みやすさを考慮し、以下では仮名は全てひらがなで記すこととする。漢字については旧字体も原文のままとし、必要な場合は句読点を補った。また、白紙の頁については頁数として数えなかった。

1) 力の入れ方(真理は汝の眼前、脚下にあり)

ここでは、「昭和六年四月八日」に竹下が妻弟子、四女澄子との日常生活の中で偶然発見した「地球の引力」¹⁶の重要性を、植芝の「合気武術」の動作と関連付けて述べている。「地球の引力の働く方向にどんと打ち付けるか引下すかすれば其力は非常に強く作用するなり。之に反し持上げる方向に力を用ゆれば労多く効少し」(竹下, 1931a, p.1)とあるように、重力に逆らう方向に力を用いても、無駄が多い事を指摘している。そ

のため、「合気武術に於ては直下に鋭く引下し又は押下す動作多く其効力も実際多大なるものあるを見る。即ち力の入れ方もその方向により差異を生ずることあるを知るべし」(pp.1-2)と述べ、合気武術で用いられる力も、引いたり押ししたりしながらも下方向に用いられることが多いという¹⁷。力は重力に逆らわずに発揮することで大きな効果があるのであり、同じ力でも用いる方向により結果が異なるとしている。

続いて、高所にあるものを懸命に手を伸ばすことで掴むことができたり、火事場の馬鹿力と呼ばれる現象の背後にある、人間の精神的能力或は潜在的能力を「精神の力或は霊力の作用」と呼んでいる。さらに、悲観的な考えを持たずに肯定的な考えを持つ(「神明の加護を信じ」)ことでなしとげることができる¹⁸と説明している。それを偉大な「神霊の作用」(p.2)と呼んでいる。

最後に、合気武術において相手と相対するときは、相手の「外貌の強大なるに警怖の念を起すことなく必ず彼を壓倒して打勝つべしと自信し一心に精神を集中してかかれば案外容易に彼を倒すことを得べし 常に斯くの如き意氣を以て敵に對することを忘るべからず」(p.3)と述べる。相手の強大な外見に緊張や恐れを持つことなく、相手に圧倒して勝利するという自信や集中力を持つことが必要であると説いている。以上のことは世間のあらゆることに通用するものであり、そこでも気の緩みや迷いの気持ちを持つてはならないという。これは現在のスポーツで説かれる精神力とも通じるものがある。竹下が武道の勝負の世界、そして広く日常生活万端において、精神主義を軽視していなかったことが理解できよう¹⁸。

2) 研究者の心得

此術を研究するものの第一の心得は全然自分の今迄修得せる術を放棄し全く真空になりて之を受入れねばその妙所に觸ることは出来ない 少しにて力にたより或は業にたよりて之を比較研究する様にては到底妙處に達すること得ず 即ち全然白紙となりて「いろは」から入門する覚悟が必要である そ一すれば案外早くその神髓に觸ることが出来る(竹下, 1931a, pp.3-4, 下線引用者)

合気武術を修行する際の心構えについてふれた箇所である。合気武術を学ぶ際は、第一に既習の武術の知識等一切を捨て去り、完全なる初心で向かう必要が

あるという。他武道との比較研究も批判されているが、植芝の弟子の中には柔道と比較研究しながら合気武術を修行した 富木 謙治 (1900-1979) や 望月 稔 (1907-2003) といった者もあり、必ずしも比較研究が間違っているとはいえないだろう¹⁹。ここでは、師から合気武術の指導を受ける際に、学習の妨げになるような知識は持たず、師の教えを素直に学ぶ姿勢が必要だと説いていると考えられる²⁰。

3) 力の用ひ方

或る方向に力を入れたときは全身の力を之に集中して分力を生ぜざる様注意し目的を達するまで遂行すべし 途中に於て氣を抜くべからず

又前述の如く必ず出来るものと確信して働きかけるときは十中九分迄は好結果を得べし 途中の障碍を撃破して感効の彼岸に達するには一切の弛緩怠慢、油断、遲疑を排棄し精神をこめ全力を終結して遂行するを緊要とす(竹下, 1931a, p.4)

1) 「力の入れ方」と関連して、ここでは合気武術において力を集中させることを述べている。全身の力を用いること、その力を分散させずに一方向に集中させ続けること、目的達成のため精神を集中させ、油断なく自信を持って力を発揮することの必要性を説いている。現代でも用いられる合気道の重要な概念の一つに「呼吸力」がある。各指導者の「呼吸力」の意味を通覧した志々田 (1985, pp. 67-68) は、「呼吸も含むさまざまな能力を統一した力を、客観的に、素直に表わす言葉」として「統一力」という概念を提示している。ここで竹下が説明する力も、呼吸力や統一力と同様のものと考えられる。

続いて、庭や林の中を散歩中、額や眼の高さにある蜘蛛の巣を避けようとして頭を後方に引いたり、裸足で歩行中に素足に蔓植物がからまって倒れかけた事例を挙げ、「対手を操縦するに最も有効なるを見出すべし」としたうえで、以下のように述べる。

彼我相對するとき彼右手にて我左手を取るときその瞬間に右手にて眼かくしを打たんとすれば彼は一寸頭を後ろに引くべし 此時直に乗じてそのまま掌を額にあて左手も呼吸を入れ左斜前に低く出すと同時に右足をすすむれば彼は背後に倒るべし 又彼右手を出し来るとき急に右手刀を彼の左肩上に突出しつつ右足を彼の右側背に進むときは容易に彼を倒すを得べし

或は左手を引きながら之を上げて彼の咽喉部を打ち左足を彼の右側背にすすめ右手刀にて腹部を打ち背後に倒す 相手が両手又は片手を出し来るとき右掌にて額を押し付けると同時に右足を鋭く踏出し且つ我体勢を不敗の地位に保ちつつ前進すれば容易に彼を背後に倒すことを得 前項の場合彼丈高きときは右掌にて腮を突上ぐべし(竹下, 1931a, p.5, 下線引用者)

最初の四つの段落ではそれぞれ異なる具体例が挙げられているが、それらを通じて述べられているのは自身の重要性である。柔道と合気武術を比較研究した富木 (1991, p.219) によれば、古流柔術にみられる当身技には二つの性格がある。拳や手刀、足などを用いて打・突・蹴をおこない「一撃必殺の破壊的衝撃を与えるもの」と、「一点の力によって相手の姿勢を崩し、そして倒す」ものの二種類である。第一、第三の用例では牽制のためにそれぞれ眼球、咽喉・腹部という急所を攻めているものの、あくまでも攻撃の主眼はバランスを崩した相手を「倒す」ことにある²¹。同時に、全ての用例を通じて相手の力学的弱点の方向へ移動しながらわざを施し、相手を倒していることも注目すべきであろう²²。講道館に伝わる「古式の形」や「五つの形」を研究した富木 (1991, p.195) は、「柔らかい一点の力でも、それが持続力としてはたらくとき、相手を倒すことができる」ことを教えている。

なお、最終段落では身長の高い相手の場合に、額ではなく顎を突き上げることが書かれているが、これは相手との身長差を補うために顔面の低所の顎を攻撃するという意味だけではなく、顎を押し上げることで相手の後退する力が減退し、こちらの相手を押す力が有効にはたらくことを踏まえたものと考えられる²³。

4) 武藝者の心得

ここでは、修行者の守るべき心得が 11 項目挙げられている。竹下自身の当時の問題関心も含め、植芝の指導の影響も看取できる内容である。以下ではそのうちの 1、3、4、9、10 番目の項目についてみていく。

1 点目では、「一、兵法を習練するものは常々その修得したる武術を繰返し繰返し熱心に練習し動作は自然に妙處に嵌る様になり如何に不意なる襲撃に逢ふも狼狽せず之に速應する如く身体と精神を鍛錬し些の油断あるべからず」(竹下, 1931a, p.6) とある。反復練習の

必要を説き、油断を戒めている。9 点目も同様で「一、先づ我心中の敵を退治し油断と云ふ大敵を打ち掃ひ置くを要す」(p.7)とある。当時の植芝が油断を戒めていたことは弟子たちも語っている(合気ニュース編, 2006a, p.113, 221)。

3 点目には「一、身体健全ならざれば如何なる妙技を施すに由なし故に我身の健康を保続するは武術の一部なりと心懸け金鐵のごとき筋肉を養成するに努むべし」(p.6)とある。4 点目では「一、故に飲食を適度にし過飲暴食を慎むのみならず、時には小食若くは断食をも甘んじて忍ぶ修養を積み戦地に於ける困苦欠乏に耐へるの覚悟あるべし。古より腹八分に醫者いらすの諺あり。過食せんよりは寧ろ小食に甘んずるの妙を翫味すべし」(p.6)とある。これらは、修行の結果得た実力を最大限発揮するための自己管理として健康の保持と食事の節制を説いたものと理解される。黒沢(波多野勝他編, 1998, p.71)によれば、竹下は大正 7(1918)年に執筆された「三省録」の中で、既に健康問題への心がけを述べていた。また、植芝自身も食事に気を付けていたことは当時の弟子たちの回想にもある(合気ニュース編, 2006a, p.86, pp.114-115)。

10 点目では、「一、他人に術を見せる心あるべからず」(p.7)と、他人に合気武術のわざを無闇にみせないようにと注意がある。『乾』、『坤』が執筆される時期の植芝が、内弟子同士にも稽古をさせず、無闇にわざを披露しなかったことは弟子たちによって語られている(合気ニュース編, 2006a, p.198, 209)。この点からも、植芝の技術を具体的かつ詳細に記録した『乾』、『坤』の史料的价值は大きいといえる。

5) 呼吸大事の事(息にあらず)

一、体勢をととのへ不敗の位置を占め全力を入れ勢鋭くどっと突きかかり、切り下し或ははね飛ばし又は投げ付けるを緊要とす

一、正氣進るところ金錢も亦透るの猛烈なる呼吸全身に満るときは如何なる堅固の抵抗も之を撃破粉碎するに至るべし 此處に至れば精神力乃ち靈力良となり術力体力之に従ふてその全力を発揮し得べし

一、躊躇逡巡狐疑は最も忌み嫌ふべし 中途半端や氣の弱きこと、やりかけて途中より変向するやうな事は禁物なり必ず熟慮断行即一念をやり通すべし

一、術は小なるべからず 土用浪の如く大きく寄せて大きく返す心持ちあるべし

一、纏るときは芥子粒の如く擴がるときは天地の間に充塞するの概あるべし(竹下, 1931a, p.8)

「息にあらず」という表現からは、ここで説かれる「呼吸」が単なる呼気や吸気を指しているのではないことが示されており、合気武術における呼吸について 5 点論じられている。1 点目は、姿勢を安定させ全力でわざを施すこと。2 点目、「正氣」(正しい意気²⁴)がほぼばしるように、猛烈な呼吸が全身に満ちると、どんな堅い守備の抵抗も打ち破ることができる。すると精神力(靈力²⁵)がよい状態となり、技術のレベルや体力もそれに従ってよい状態となり、全力を発揮できる。3 点目、前述の注意と合わせ、ためらいや中途半端にわざをかけることを禁止している。4 点目、わざを施すときは大きな動きでかけるべきことを説いている。5 点目、呼吸を吐き出す時は芥子粒のように小さくなるくらい吐き出し、吸う時は天地を満たすように大きく吸うことを説いている。以上から、お互いの動きのやり取りについて「呼吸」という表現を使うのが当時は一般的であったことがわかる。

植芝の子息であり後継者の吉祥丸(1921-1999)が最初に著した合気道の関連書籍、『合気道』(1957)では、技術解説にしばしば「氣力」、「氣の力」といった用語を用いており、それらを合気道における最重要の要素と位置付け、別名を「呼吸力」としている。「すべての動き、すべての技に、呼吸力が充実すれば、その動き、その技は、滔々と流れる水の如く断続のない、調子の整った、生き生きしたものになるのである。…人間の氣持、氣というものが、その万事に重大なる影響のあることは、今更言うまでもない。…氣力充実し必勝の信念を以て事に当れば、普段に数倍する威力を発揮することができる。(同書, pp.152-153)」以上の引用からもわかるように、呼吸を運動機能と関連させる竹下の認識は、その後の合気道の指導者にも通じるものであることがわかる。

6) 合氣の事

一、相手の心を洞察し之を自由に操縦するを得るに至れば最も妙なるが始めは彼が我に觸る機に彼我一体となり彼は私の延長なりと心得以て彼を制し得ることを習練すべし 遂にはその妙處に達するを得べし(竹下, 1931a, p.9)

筆者・志々田(2010, pp.455-456)は、この合気の事に記された事項を、相手が自分に接触する瞬間に、相手を自分の体の一部分とすることで相手の動作をコントロールする技術であることを指摘した。合気道の根本概念である合気は、時代とその使用者ごとに意味が変遷していく²⁶が、基盤形成期において技術的意味で用いられていたことを証明するものである。しかも、「最も妙」、「初めは」という表現や「習練」という表現からも明らかのように、合気という技術は練習によって到達できる段階が異なると竹下が認識していたことがわかる。なお、『乾』、『坤』の中で合気について独立して説明を加えている箇所はここだけである。

7) 教導の心得

合気武術の修行者の第一に注意すべきこととして、習得した技術の悪用を禁止している箇所である。やむを得ない場合に限り、「正当防禦即ち自衛の為のみに用ゆる外は容易に手出すべからず」(竹下, 1931a, p.10)と使用を許可している。教え導く際の心構えという面に加え、4) 武芸者の心得にもあったように、「傲慢の氣を起すべからず」等と修行者の守るべき心得についても書かれている。

8) 呼吸投の注意

合気道には呼吸投げと呼ばれる技術が現在も存在するが、その注意が四点述べられている箇所である。筆者と志々田(2010, p.456)は、相手の動きの出鼻を自分と一致させて「一身となし之を思ふ様に操縦す」と述べた第一点目と、相手の「体の動き、心の動きを能く洞察」するか「第六感にて自然に感知して之に氣を合せ彼を自由に制する」ことを最善とした二点目に注目し、タイミングを合わせて相手の身体を自分の身体と一致させ、これを自由に操縦することのできる技術が呼吸投げであると定義した。また、ここで用いられている合気の意味を「自分と相手の動きのタイミングを合わせる技術であると同時に相手を思うようにコントロールする技術」であるとした。

一方、筆者と志々田(2010, p.458)は『乾』、『坤』とほぼ同時期に執筆された植芝の著作『武道練習』(1933)に「合気投げ」という、これも現代の合気道で用いられている技術が掲載されていることに注目し、掴まれた自

分の手を通じて相手の攻撃を不能にさせ、そのまま投げられる技術を合気投げと定義した。以上から考えると、ここで述べられる呼吸投げと合気投げは、どちらも合気という技術を用いて相手を投げていることから、類似した技術であるといえる。自らと相手と動きのリズムを同調させる(呼吸を合わせる)ことを強調しているものが呼吸投げであると考えられる。

第三点目では、「一、慮既定、心乃強、進退無疑」(竹下, 1931a, p.11)と、武経七書の一つである『司馬法』、定爵第三から引用がなされている。公田・大場(1936, pp.136-137)は「司馬法」における同箇所を、「慮(おもんばかり)既に定まれば、心乃ち強し。進退、疑ふ無かれ。」と訓読し、「謀慮(ぼうりよ)既に預(あらかじめ)確定するときは、心、恃(たの)む所有りて強盛(きょうせい)なり。謀慮は先づ定まらんことを要す。」「進むべきときは進み、退くべきときは退き、進むにも退くにも疑惑すること無かれ。」と注を付している。決断が力強い行動を支える基となり、躊躇を戒めるという、わざを施す際の心構えについてふれたものと考えられる。

第四点目は、「一、夫爲劔者後之以發。先之以至」(p.11)と、『莊子』雜篇の説劍第三十を引用している。市川・遠藤(1967, p.766)は『莊子』における同箇所を「莊子曰く、「莊子曰く、夫れ劔を爲す者は、之を示すに虚を以てし、之を開くに利を以てし、之に後れて以て發し、之に先んじて以て至る。」(下線引用者)と訓読し、「莊子が更に言った、『そもそも劔撃というものは、まずこちらのすきを見せて、利で相手を誘い込み、相手より後れて劔を抜きながら、しかも相手より先に打ち込むのです。』」(下線引用者, p.767)と訳している。呼吸投げとの関連で考えると、相手に先手は取られながらも結果として相手に先んじる(投げる)、「後の先」について述べたものと考えられる²⁷。

以上の中国古典からの引用は、植芝の指導をそのまま記録したものとは考えにくい。植芝の弟子たちによれば、植芝のわざの説明にはもっぱら『古事記』や大本教の神様の名前が出て来たというものが多からた²⁸。ここは、竹下が呼吸投げの要点を中国古典で解釈したものと考えられよう。

2. 格闘形態別の分類

呼吸投の注意の後、12 から 13 頁にかけて、竹下が作成した目次が記されている(工藤, 2013, pp.186-187)。

目次は、技術数、通し番号、格闘形態の三段で記されている。例えば、通し番号1には「前面より我両手首をとらんとするとき、(とるとき)」とあり、相手の攻撃の形態を示している。本文ではその後「一、両手にて我両手首を把る時」、「一、両手を出し来る時」など7つの小見出し(格闘形態)に分けられ、その中に合計241手の対処法が示されている(工藤, 2013, pp.187-188)。

今回改めて『乾』、『坤』を調査した結果、両史料に共通する特徴として、それぞれの小見出し(格闘形態)内で、異なる格闘形態が記されている場合があることが判明した。これは、竹下が整理不十分なまま編纂したことが原因と考えられる。これは、両史料を扱う際の厄介な問題である。なぜなら、解読者自身に合気道または大東流の実技経験がなければ判断が難しくなるからである²⁹。

こうした史料的制約や先行研究の問題をふまえ、本研究では『乾』、『坤』に記された技術を分析するための前段階の作業として、まずは格闘形態による分類を試みる。その際、以下に述べる富木の分析枠組みを用いる。古流柔術の技術を分類・整理した富木(1991, pp.120-121)は、柔術の格闘形態を以下のように分類した。

- ① 徒手対徒手
 - (1) 組んで対する
 - a. 衣服(襟、袖など)に組みつく
 - b. 素肌(腕、手首など)に組みつく
 - (2) 離れて対する
- ② 徒手対武器
- ③ 武器対武器
- ④ 一人対多数
- ⑤ 立位対座位、または立位対臥位

上記の①から③までは一対一の攻防で、互いの武器の有無に基づく分類である。④は相手の人数、⑤は互いがどのような態勢でわざを施すかという観点に基づく分類である。合気道や大東流では、基本的にお互いが立った状態、お互いが正座した状態、正座した状態で立った相手の攻撃に対処する、という三種の状況が想定されている。本研究ではそれぞれを「立技(たちわざ)」、「座り技(すわりわざ)」、「半座・半立技(はんざ・はんだちわざ)」とし、『乾』を分類する。なお、攻撃してくる相手を「受」、わざを施す側の立場を「取」とする。また、『乾』、『坤』ともに1つの技術に別法が記されている場合(「右掌にて腮を突上げるか右拳にて水月を突く」等)があるが、煩雑になるのを防ぐため、竹下が振った通し番号1つの技術を1手とするのを原則とした。以上の基準で『乾』を整理し直したものが表1である。

表 1 『乾』格闘形態

格闘形態		技術数	計		
組んで対する	手首取り	受が両手で取の両手首を取る場合	213	275	648 (39.6)
		同上	9		
		同上	52		
		同上、さらに右足で蹴る場合	1		
		受が両手で取の右手首を取る場合	41	67	
		受が両手で取の右手首を取る場合	26		
		受が左手で取の右手首を取る場合	131		
		同上	2	210	
		同上、さらに右手で打ちかかる場合	10		
		同上	7		
		受が左手で、取の右側から取の右手を取る場合	60		
		受が右手で取の左手首を取る場合	72	76	
		同上	2		
		同上	2		
		受が右手で取の右手首を取る場合	18	18	
	【裏手】取が出す右手を受が右手に取り、引き込む場合	2	2		
	袖、手首取り	受が右手で取の左袖を取り、左手で取の右手首を取る場合	6	6	6(0.4)
	袖取り	受が両手で取の両袖を取る場合	20	20	401 (24.5)
		受が左手で取の右袖を取る場合	76	313	
		同上	14		
同上		11			
同上、さらに右手で打ちかかる場合		204			
同上		4			
同上		4			
受が右手で取の左袖を取る場合		63	68		
同上	5				
腕取り	受が両手で取の両腕を取り、押して来る場合	6	6	6(0.4)	
胸、手首取り	受が右手で取の胸元を取り、左手で取の右手首を取る場合	3	3	3(0.2)	
胸取り	受が右手で取の胸元を取る場合	32	32	53 (3.2)	
	受が左手で取の胸元を取る場合	4	21		
	同上、さらに右手で打ちかかる場合	17			
襟取り	受が取の両襟を取り、締め付ける場合	23	25	25 (1.5)	
	同上	2			
頭髮取り	受が右手で取の頭髮を掴む場合	1	1	1(0.05)	
膝取り	受が左手で取の右膝を取る場合	1	1	1(0.05)	
離れて対する	手を出してくる	受が右手を出してくる場合	61	62	66 (4.0)
		同上	1		
		受が左手を出してくる場合	3	3	
		【裏手】取が右拳を出して誘いをかける場合	1	1	
	正面突き	受が右拳で突いてくる場合	103	103	103(6.3)
	正面打ち	受が右手で取の正面に打ちかかる場合	205	235	237 (14.5)
		同上	30		
		受が左手で取の正面に打ちかかる場合	1	1	
		【裏手】取が右手で打ちかかるのを受が両手で打ち付けて受ける場合	1	1	
	正面打ち、手刀突き	受が右手刀で取の頭部を打ち、左手刀で突いてくる場合	3	3	3(0.2)
	横面打ち	受が右手で取の横面に打ちかかる場合	73	76	81 (5.0)
		受が右手で取の左横面を打つ場合	3		
受が両手で取の横面を交互に打ちかかる場合		5	5		

本表は内容に基づいて筆者作成。表の中の()内の数字は『乾』全体(1634手)の中の割合(%)を示す。

「掴む」、「握る」等の動作は全て「取る」で統一した。

表中の「格闘形態」欄の塗りつぶしは以下の通りとする。

立技
座り技
半座・半立技

表 1 に示されている通り、『乾』は全て前面の相手に対する徒手対徒手の技術を想定していて、収録されている技術数は合計 1634 手、組んで対する技術が全体の 70%の 1144 手、離れて対する技術が 30%の 490 手であり、組んで対する技術が離れて対する技術の倍以上であった。組んで対する技術は大まかに 9 つの格闘形態があり、さらに 35 の格闘形態に細分化できる。離れて対する技術は 5 つの格闘形態があり、13 の格闘形態に細分化できた。

組んで対する技術の中で、最も技術数が多いものが手首を掴まれた場合のもので、これは『乾』全体の約 40%を占める。次いで袖を掴まれた際の技術が全体の約 4 分の 1 を占めた。離れて対する技術の中で、最も

技術数が多いのは正面から手刀で打ちかかってくる場合であり、次いで正面から拳で突いてくるものである。

立技、座り技、半座・半立技の技術数でみると、それぞれ 1396 手(85.4%)、75 手(4.6%)、163 手(10%)であり、ほとんどが立ち技であった。

ここで、『乾』と現在の合気道の標準的な格闘形態と比較を試みたい。植芝の後継組織である合気会が出版している公式の技術書に、『規範合気道』(基本編・応用編)の 2 冊があり、合計 223 手の技術が収録されている(基本編 71 手、応用編 152 手)³⁰。この 2 冊から『乾』と同じく、正面からの相手に対する徒手対徒手の格闘形態をまとめたものが表 2 である。

表 2 『規範合気道』より『乾』と共通の格闘形態

格闘形態		技術名称	技術数	計			
組んで対する	手首取り	受が両手で取の両手首を取る場合	両手取り四方投げ(表)(裏)	2	73 (45.1)	103 (63.6)	
			天地投げ(表)(裏)	2			
			両手取り腰投げ(I)(II)	2			
			両手取り呼吸投げ(I)(II)(III)	3			
		同上	呼吸法・座法	1			
		同上	半身半立両手取り四方投げ(表)(裏)	2			
		受が両手で取の左手首を取る場合	呼吸法・立法(表)(裏)	2			3
			諸手取り腰投げ(I)	1			
		受が両手で取の右手首を取る場合	諸手取り入身投げ(入身)(転換I)(転換II) 諸手取り四方投げ 表(I)(II)(III) 諸手取り腰投げ(II)(III) 諸手取り十字絡み(I)(II) 諸手取り呼吸投げ(I)(II)(III)(IV) 諸手取り小手返し 諸手取り第一教(入身)(表)(裏) 諸手取り第二教(入身)(表)(裏) 諸手取り第二教(転換)(表)(裏) 諸手取り第三教(入身)(表)(裏) 諸手取り第三教(転換)(表)(裏) 諸手取り第四教(入身)(表)(裏) 諸手取り第四教(転換)(表)(裏)	3			29
				3			
				2			
				2			
	4						
	1						
	2						
	2						
	2						
	2						
	2						
	受が左手で取の右手首を取る場合			片手取り回転投げ(内回転)(外回転) 片手取り第三教(逆半身)(表)(内回転) 片手取り腰投げ(I)(II) 片手取り呼吸投げ(内回転)(外回転)	2		
		1					
		2					
		2					
	同上	半身半立片手取り回転投げ(内回転)(外回転)	2				
	受が右手で取の左手首を取る場合	片手取り四方投げ(逆半身)(表)・片手取り四方投げ(逆半身)(裏) 片手取り入身投げ(逆半身)(入身)・片手取り入身投げ(逆半身)(転換) 片手取り小手返し(逆半身) 片手取り第一教(逆半身)(表)・(裏) 片手取り第二教(逆半身)(表)(裏) 片手取り第三教(逆半身)(裏)(内回転) 片手取り第四教(逆半身)(表)(裏) 片手取り肘極め	2	15			
			2				
			1				
2							
2							
1							
2							
1							
同上	半身半立片手取り四方投げ(表)(裏)	2					
受が右手で取の右手首を取る場合	片手取り入身投げ(相半身) 片手取り四方投げ(相半身)(表)・片手取り四方投げ(相半身)(裏) 片手取り第一教(相半身)(表)・片手取り第一教(相半身)(裏)	1	5				
		2					
		2					
肩取り	受が両手で取の両肩を取る場合	前両肩取り合気落とし	1	27 (17.3)			
		受が左手で取の右肩を取る場合	肩取り正面打ち入身投げ		1		
	肩取り正面打ち四方投げ 表		1				
	肩取り正面打ち十字絡み(I)(II)		2				
	肩取り正面打ち呼吸投げ(I)(II)		2				
	肩取り正面打ち小手返し		1				
	肩取り正面打ち第一教(入身)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第一教(転換)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第二教(入身)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第二教(転換)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第三教(入身)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第三教(転換)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第四教(入身)(表)(裏)		2				
	肩取り正面打ち第四教(転換)(表)(裏)	2					
受が右手で取の左肩を取る場合	肩取り第一教(表)(裏)	2					

		受が右手で取の左肩を取る場合	肩取り第二教(座)(表)(裏)	2				
	胸取り	受が右手で取の胸を取る場合	胸取り第二教(表)(裏)	2	2	2(1.2)		
離れて対する	正面打ち	受が右手で取の正面に打ちかかる場合	正面打ち回転投げ	1	23	26 (16.0)		
			正面打ち肘極め	1				
			正面打ち入身投げ	1				
			正面打ち第一教(表)(裏)	2				
			正面打ち小手返し	1				
			正面打ち第二教(表)(裏)	2				
			正面打ち第四教(表)(裏)	2				
			同上	正面打ち第一教(座技)(表)				1
		同上	正面打ち第三教(座技)(表)(裏)	2				
		同上	半身半立正面打ち入身投げ	1				
			半身半立正面打ち小手返し	1				
			半身半立正面打ち第一教(表)(裏)	2				
			半身半立正面打ち第二教(表)(裏)	2				
			半身半立正面打ち第三教(表)(裏)	2				
	半身半立正面打ち第四教(表)(裏)		2					
			受が右拳を取の正面に振り下ろして くる場合	正面打ち第五教(表)(裏)	2	2		
			受が左手で取の正面に打ちかかる 場合	正面打ち第一教(座技)(裏)	1	1		
	横面打ち	受が右手で取の左横面を打つ場合	横面打ち小手返し(I)(II)	2	26	28 (17.3)		
			横面打ち第一教(入身)(表)(裏)	2				
			横面打ち第一教(転身)(表)(裏)	2				
			横面打ち第二教(入身)(表)(裏)	2				
			横面打ち第二教(転身)(表)(裏)	2				
			横面打ち第三教(入身)(表)(裏)	2				
横面打ち第三教(転身)(表)(裏)			2					
横面打ち第四教(入身)(表)(裏)			2					
横面打ち第四教(転身)(表)(裏)			2					
横面打ち肘極め			1					
横面打ち入身投げ			1					
横面打ち四方投げ(表)(裏)			2					
横面打ち小手返し			1					
同上			半身半立横面打ち入身投げ	1				
		半身半立横面打ち四方投げ(表)	1					
		半身半立横面打ち小手返し	1					
		受が右拳で取の横面を打つ場合	横面打ち第五教(表)(裏)	2			2	
		正面突き	受が右拳で突いてくる場合	突き入身投げ(入身)・突き入身投げ(転身)			2	5
突き回転投げ				1				
突き小手返し(入身)	1							
突き小手返し(転身)	1							

本表は内容に基づいて筆者作成。

表の中の()内の数字は『基本篇・応用編』中の『乾』と同様の格闘形態の技術(162手)の中の割合(%)を示す。

「掴む」、「握る」等の動作は全て「取る」で統一した。

表中の「格闘形態」欄の塗りつぶしは以下の通りとする。

立技
座り技
半座・半立技

『規範合気道』では組んで対する技術が全体の 60% を超える 103 手、離れて対する技術が 40% 弱の 59 手であった。組んで対する技術は大まかに 3 つの格闘形態があり、さらに 15 の格闘形態に細分化できる。離れて対する技術は 3 つの格闘形態があり、9 つの格闘形態に細分化できた。

組んで対する技術の中で、最も技術数が多いものが『乾』と同じく手首を掴まれた場合のもので、これは全体の約 40% を超える。次いで肩を掴まれた際の技術が全体の約 17.3% を占めた。離れて対する技術の中で、最も技術数が多いのは手刀で横面を打ちかかってくる場合であり、次いで正面から手刀で打ちかかってくるものであった。

立技、座り技、半座・半立技の技術数でみると、それぞれ 136 手(84.0%)、7 手(4.3%)、19 手(11.7%)であり、ほとんどが立ち技であった。これは『乾』とほぼ同内容の比率である。

『乾』と『規範合気道』を比較すると、それぞれの独自の格闘形態としては、前者には袖を持たれた場合や頭髪を掴まれた場合があったのに対し、後者では肩を持たれた場合が存在していた。しかし、格闘形態の数から明らかなように、『乾』は『規範合気道』の約 2 倍の格闘形態を想定している。

3. 技術的特徴

ここでは『乾』の技術的な特徴を概観する。まず注目すべきは、大東流の技術の影響がみられることである。『乾』には先述したように、大東流と同じく技術としての合気について論じられた箇所がある。また、大東流で現在でも用いられている手首の関節技などの技術の名称である「二ヶ条」(53 例)、「三ヶ条」(127 例)、「四ヶ条」108 例(「四カ条」1 例)、「五ヶ条」2 例(「五カ条」(2 例))、がそれぞれみられる³¹。「二ヶ条に取り」、「二ヶ条式に取り」という記述があることから、各ヶ条を技術の名称として用いている。五ヶ条の 2 例に関しては、取が右手で受の右手を掴み、左手を受の上腕にかけ抑えつける、というように一連の動作の名称として用いられている。「一ヶ条」について、『乾』には 2 例みられるが、いずれも「一ヶ条四方投」とある。大東流合気柔術の近藤勝之氏は、大東流と合気道の技術の違いについて、「一カ条」から「五カ条」まで大東流では計 118 手のわざが存在し、それを秘伝目録というが、合気道はその中の 5 手だけをとり第一教から第五教までにしたのだらうという³²。『乾』にある 2 例の「一ヶ条四方投」

は、30 手ある一ヶ条の中の四方投、ということを示している³³。つまり、『乾』においては現在の合気道にも存在する関節技などの技術の一名称としての二から五「ヶ条」と、複数の技術の総称としての一「ヶ条」が混在して用いられていたことがわかる。

大東流の伝書と他の古流武術の伝書を比較検討した高橋(2007, pp.237-238)は、古流武術の巻物の多くが伝授された形の名称を記した目録であったのに対し、大東流の伝書は形や技法を記録した「覚え書き」形式を採用しているとその特殊性を指摘している。『乾』や後にみる『坤』も敵の攻撃方法とそれに対する防御、反撃方法を記している点で、大東流の伝書と類似した性格を持つものであるが、その記述の具体性、想定した多様な格闘形態と収録している技術数において違いがある。これは、竹下が合気武術の膨大な技術の備忘録として両史料を記したという事情による。

こうした大東流の明確な影響がある一方で、『乾』には他流派の名称も散見される。受が右手で打ちかかってくる際、「柳生流の如く両手にて矢筈に受け」と「柳生流」の名がみられる(同様の攻撃方法に対し、『乾』には立技で 4 例、座り技で 1 例確認できる)。しかも、この 5 例の中で立技の 2 例には相手の攻撃を受け止めるだけでなく「左肘にて肋を突き」と攻防一体となった技術となっている。また、受が右拳で突いてくる際の技術で、「両手に呼吸を入れ上下(陰陽の構)に構へ」(1 例)、受が右手で打ちかかってくる際の技術で「両手を真影流の陰陽に構へ」(2 例)と「真影流」と「陰陽の構」という記述も存在する。こうした他流派の記述が『乾』、『坤』でどれだけみられるかについては、次章で『坤』の内容を検討するときに併せてみていく。

次に『乾』の技術的特徴としてみられるのは、その実戦性・殺傷性である。例えば、相手に「激突」、「激しく衝突」、「激衝」あるいは「激打」して倒すという表現が『乾』に 17 例みられる。「一撃」で倒すという表現や(5 例)、腕や脚を「折る」という技術もみられる。「稽古」・「練習」の際には怪我を伴う危険な技術であるため注意を促す記述もみられる(18 例)。これらはあくまで表現上から殺傷性のある技術を拾い上げたに過ぎず、実際わざを再現してみると危険なわざはこれ以上に多い。

最後に、「裏手」と記された技術がある。手首取りの立技に 2 手、手を出してくる場合の立技に 1 手、正面打ちの座り技に 1 手と合計わずか 4 手に過ぎないが、いずれも取の方が先手を取って攻撃しており、それに受が反応し、さらにそれに取が対処する技術を載せてい

る。合気道というと、現在では護身術や専守防衛という印象を持たれる³⁴が、当時の植芝が必ずしも相手の攻撃への防御を中心とした技術だけを指導していなかったことが判明した。しかし、『乾』内の裏手は非常に少数であり、これだけでは当時の植芝がこういった技術をまとまって教えていたとはいえないだろう。こうした問題の検討も含め、次章では『坤』をみていく。

Ⅲ. 覚書『坤』

『乾』と同じく、『坤』もルーズリーフに書かれバインダーに収められている。『坤』は表紙を除いた 246 頁に渡って書かれており(途中白紙の 45 頁も含む)、表紙の構成も『乾』と同様である。『坤』は『乾』のように合気武術の武術論がまとまって記された部分がなく、技術の記録が中心である。

1. 格闘形態別の分類

『坤』には 1-2 頁と 74 頁に 2 種類の目次が記されている。筆者が目次を詳細に調べた際、『坤』には「裏手」と記された技術が多く記されていた(工藤, 2013, pp. 195-203)。そこで、『乾』と同様の分類基準を用いて『坤』を整理し直したものが表 3、『坤』の裏手だけをまとめたものが表 4 である。

表 3、4 に示されている通り、『坤』には合計 1097 手の技術が記されている。組んで対する技術が全体の 60% を超える 699 手(63.7%)、離れて対する技術が 398 手(36.3%)であった。『乾』同様、組んで対する技術が 60% を超える。組んで対する技術は大まかに 25 の格闘形態があり、さらに 61 の格闘形態に細分化できる。離れて対する技術は 33 の格闘形態があり、47 の格闘形態に細分化できた。

組んで対する技術の中で、最も技術数が多いものが柔道対抗技 147 手であり、次いで受が背後から取の襟と手首を握る場合であった。離れて対する技術の中で、最も技術数が多いのは素手で武器に対処する技術であり、『坤』全体の 20% を占める。次いで、武器を持った受にも武器を持って対処する技術が全体の約 10% を占めた。

立技、座り技、半座・半立技の技術数でみると、それぞれ 1025 手(93.4%)、19 手(1.7%)、51 手(4.7%)、さらに柔道対抗技にあった寝技 2 手(0.2%)もみられたが、『乾』同様ほとんどが立ち技であった。

表 3 だけでみると、若干の徒手対徒手の正面の相手に対処する技術(8 手)を除けば、『坤』の組んで対する技術には背後からの相手を想定したものが多い(472 手、43.0%)。また、多人数を相手にする技術(22 手)や柔道対抗技(147 手)といった独特な技術も存在する。

『坤』の離れて対する技術には、蹴りに対する技術 3 手以外は、武器に対処する技術である(対武器の技術が『坤』全体の約 30%)。素手で武器に対処する技術が『坤』全体の 20% を超えるが、互いに武器を持って対処する技術も 10% 弱みられる。また、使用する武器も太刀、短刀が多くみられるが、棒や槍、薙刀、銃剣、鉄扇、ピストル等といったものもみられる。

次に、『坤』と現在の標準的な合気道の格闘形態との比較を試みたい。『規範合気道』(基本編・応用編)の 2 冊から『坤』の大多数の技術である背後からの相手に対する技術、多人数の相手に対処する技術、対武器の技術の格闘形態をまとめたものが表 5 である。

『規範合気道』では組んで対する技術が全体の 70% 弱の 42 手、離れて対する技術が 30% 強の 19 手であった。組んで対する技術は 6 つの格闘形態があり、離れて対する技術は 3 つの格闘形態をさらに 4 つに分けることができた。

組んで対する技術の中で、最も技術数が多いものが背後から両手首を掴まれた場合のもので、これは全体の約 30% である。次いで背後から両肩を掴まれた際の技術が 18% を占めた。離れて対する技術の中で、最も技術数が多いのは徒手で短刀に対処する技術であるが、対太刀や対杖の技術数と大差はない。

立技、座り技の技術数でみると、それぞれ 59 手(96.7%)、2 手(3.3%)であり、ほとんどが立ち技で半座・半立技はみられなかった。立技の比率が圧倒的なのも『坤』とほぼ同じである。

『坤』と『規範合気道』を比較すると、それぞれの独自の格闘形態としては、『坤』には背後から袖を持たれた場合や抱え込まれた場合、羽交締めにされた場合、頭髮を掴まれた場合の技術がみられたのに対し、『規範合気道』では背後から両肘を持たれたときの技術があった。しかし、『坤』は『規範合気道』の 10 倍を超える格闘形態を持っていた。特に、武器を扱う技術の種類においては『坤』の方が多彩であった。また、他武道である柔道に対抗する技術を植芝が指導していたことも、現在の合気道とは異なるものである³⁵。

表3 『坤』格闘形態その1

格闘形態		技術数	計		
組んで対する	手首取り	受が取の右側から近付き、左手で取の右手首を取る場合	5	5	60 (5.5)
	後手首取り	受が取の背後から取の両手首を取る場合	48	55	
	後袖取り	受が取の背後から、右手で取の右手を取る場合	7	35	35 (3.2)
		受が片手で取の右袖(袂)を背後から取る場合	23		
		受が片手で、右手に傘または棒を持つ取の右袖(袂)を背後から取る場合	2		
		受が取の背後から取の右肘の辺りの袖を取り引く場合	8		
	袖取り、正面打ち	受が取の背後から取の両袖を取る場合	2	3	3(0.3)
	後腕取り	受が左手で取の右袖を取り、右手で打ちかかる場合	3	3	3(0.3)
	後腕取り	受が取の背後から取の両腕を取る場合	8	8	8(0.7)
	後肩取り	受が取の背後から両肩を取る場合	82	104	104 (9.5)
		同上	22		
	後襟取り	受が取の背後から取の後襟を片手で取る場合	70	70	77 (7.0)
		受が取を送襟絞にする場合	5	7	
		同上	2		
	後襟取り、打ち込み	受が取の背後から取の後襟を右手で取り、左手で打ちこんでくる場合	1	1	1(0.1)
	後棒・杖・傘取り	歩行する取が持つ棒・杖・傘などを、受が右手または両手で取り引く場合	2	2	2(0.2)
	後抱え取り	受が取の背後から取の両腕の上に抱き付く場合	45	45	45 (4.1)
	後襟取り、手首取り	受が取の背後から取の後襟を右手で取り、左手で取の左手首を取る場合	45	45	135 (12.3)
		受が右手で取の背後から右肩を越え左前襟を取り、咽喉を絞め、左手で取の左手首を取る場合	60	90	
		同上	6		
		同上	24		
	羽交締め取り	受が取の背後から取を羽交締めにする場合	4	4	4(0.4)
	後頭髪取り	受が取の背後から近付き、取の頭髪を掴む場合	6	6	6(0.5)
	対二人	二人の受を同時に相手にする場合	17	22	22 (2.0)
	対三人	三人の受を同時に相手にする場合	1		
	対四人	四人の受を同時に相手にする場合	4		
対柔道	受が両手を出してくる場合	10	145	147 (13.4)	
	受が取の両手首を取る場合	5			
	受が取の襟袖に組み付く場合	51			
	受が両手で取の両袖を取るか、襟袖に組み付く場合	13			
	受が両手で取の両袖を取る場合	11			
	受が右手で取の左袖を取る場合	3			
	受が左手で取の右袖を取る場合	15			
	受が左手で取の右手を受けの胸に抑えつける場合	1			
	受が右手で取の左襟か左袖を高く取る場合	3			
	受が右手で取の前襟を取り、左手で取の帯の前部を掌を下にして掛ける場合	1			
	受が両手で取の両襟を取る場合	4			
	受が右手で取の左襟を高く取り、左手で取の右手首を取る場合	3			
	受が取を内股で投げようとする場合	1			
	受が取を大外刈で投げようとする場合	1			
	受が取を膝車で投げようとする場合	1			
	受が取を跳腰で投げようとする場合	2			
	受が取を右腰投げで投げようとする場合	6			
	受が寝技に引き込もうとして右手で取の右前襟を取り、左手で取の右袖を取り、左足を引いて斜めに構えた場合	9			
	受が右手で取の前帯を下向きに取り、左手で取の右袖を取り、右手で取を引き寄せるか引き上げて投げようとする場合	5			
受が仰臥した取の右手を、腕ひしぎ十字固め取る場合	2	2			
蹴り	受が右足で蹴ってくる場合	3	3	3(0.3)	
徒手対短刀	受が短刀を持つ場合	78	89		
	同上	11			
徒手対太刀	受が太刀を持つ場合	94	94		

649
(59.2)

996
(90.8)

離れて対する	徒手対杖	受が杖などをもち、打ちかかる場合	1	1	236 (21.5)	347 (31.6)
	徒手対棒	受が棒、銃剣または槍を持ち、突いてくる場合	12	12		
	徒手対槍	受が槍をもち、突いてくる場合	17	17		
	徒手対銃剣	受が銃剣を持ち、突いてくる場合	18	18		
	徒手対薙刀	受が薙刀を持つ場合	2	2		
	徒手対ピストル	受がピストルを近距離で突き付け、取にホールドアップを強いる場合	2	3		
			受が両手にピストルを一丁ずつ持ち、取に突き付ける場合		1	
	鉄扇対太刀	受が太刀を持ち、取が鉄扇を持つ場合	6	6	108 (9.8)	
	短刀対太刀	受が太刀を持ち、取が短刀を持つ場合	14	14		
	太刀対太刀	受、取が互いに太刀を持つ場合	61	65		
	太刀対棒、銃剣、槍	受が棒、銃剣または槍を持ち、刀を持った取を突いてくる場合	1			
	太刀対槍	受が槍を持ち、取が太刀を持つ場合	3			
	棒、銃槍、手槍対太刀	受が太刀を正眼に構え、取が棒、銃槍または手槍を持つ場合	2			
	棒対太刀	受が太刀を正眼に構え、取が棒を持つ場合	8	8		
	杖対太刀	受が太刀を持ち、長い杖をつき歩行中の取に切りかかる場合	5	5		
	銃槍対太刀	受が太刀を正眼に構え、取が銃槍を持つ場合	1	1		
	手槍対太刀	受が太刀を正眼に構え、取が手槍を持つ場合	2	2		
	槍対棒、銃剣、槍	受が棒、銃剣または槍を持ち、槍を持った取を突いてくる場合	1	1		
	薙刀、槍対太刀	受が太刀を正眼に構え、取が薙刀か槍を持つ場合	2	2		
	銃槍対銃槍	受、取が互いに銃槍を持つ場合	2	2		

本表は内容に基づいて筆者作成。表の中の()内の数字は『坤』全体(1097手)の中で占める割合(%)を示す。

「掴む」、「握る」等の動作は全て「取る」で統一した。

表中の「格闘形態」欄の塗りつぶしは以下の通りとする。

立技
座り技
半座・半立技
寝技

表4『坤』格闘形態その2

格闘形態		技術数	計			
組んで対する	裏手 手首取り	取が右手で受の左手を取り、受が右手で取の右手首を取り引き込んで左拳で取の右肋を突いてくる場合	1	1	50 (4.5)	
	裏手 袖取り	取が左手で受の右袖を取り、受が左手で取の右手を取り親指を手の甲にあて右手を掛け添え外側に捻る場合	1	1		
	裏手 袖取り、正面打ち	取が左手で受の右袖を取り、右手で打ちかかるのを受が右手で受け止める場合	1	4		11 (1.0)
		【裏手の裏手】受が左手で取の右袖を取り、右手で打ちかかるのを取が右手で下、外側から受けるのを、受が右手で取の右手を取る場合	3			
	裏手 後襟取り	取が受の背後から受の後襟を片手で取る。受は左に回りしつつ左手で取ののどを前より打つが、取が左手でこれを受止める場合	2	2		
	裏手 肩取り	取が左手で受の右袖の肩の近辺を取り、受が左手で取の左手先を取り、右手を肘にかけて押してくる場合	3	3		
	裏手 ニヶ条	受が取の右手を二ヶ条に取る場合	12	15		39 (3.5)
		取が右手で受の胸倉を取り、受が二ヶ条に取ろうとする場合	1			
		取が左手で受の右袖を取り、受が取の右手を二ヶ条に取り右に捻る場合	2			
	裏手 三ヶ条	受が取の右手を三ヶ条に取り、水平に保つ場合	4	15		39 (3.5)
受が取を三ヶ条に背後に取る場合		7				
受が左手で取の右手を三ヶ条に取り、右手で取の顔面に打ちかかる場合		1				
受が左手で取の右手を三ヶ条に取り、右手で取の咽喉を絞める場合		2				
取が受の右手を三ヶ条にとり背後に位置するとき、受が左手刀で取の左側を打ってくる場合		1				
裏手 四ヶ条	受が取の右手を四ヶ条に取る場合	9	9			
離れて対する	裏手 正面打ち	取が右手で打ちかかるのを受が左にかわし、左手で取の右手を打ち下して逆にする場合	2	22	101 (9.2)	
		取が右手で打ちかかるのを受がかわして左手で取の右腕を掴み上げ、右手で取の右手首を取り引き下して押さえつける場合	1			
		取が右手で打ちかかるのを受がかわし、両手で外側から取の右手を抑える場合	10			
		取が右手で打ちかかるのを受が両手を交差して受ける場合	1			
		取が右手で打ちかかるのを、受が右手で受ける場合	2			
		取が右手で打ちかかるのを受が右手で受け、左拳で取の右肋を突いてくる場合	2			
		取が右手で打ちかかるのを、受が両手で外側から受け止める場合	1			
		取が右手で打ちかかるのを、受が腰投げに来る場合	2			
	裏手 正面打ち、突き	【裏手の裏手】受が右手で打ちかかるのを取が左手で内側から受け、右手で受の左首筋を打つのを、受が左手で受け止める場合	1	3		
		取が右手で打ちかかるか右拳で突きかかるとき、受がかわして左手で打ち下して取の右手を握り、外側に捻って右手を掛け添える場合	2			
	裏手 正面突き	取が右拳で打ちかかるのを、受が右側にかわして両手を取の右手に掛け外側に捻る場合	1	2		
		取が右拳で受を突くのを、受が左にかわし、左手で外側から受ける場合	2			
	裏手 ニヶ条	取が右手で打ちかかるのを受が受け、二ヶ条に取ろうとする場合	1	5		11 (1.0)
		取が右手で打ちかかるか右拳で突きかかるのを、受が右側にかわし左手で二ヶ条に持ち外側に捻ろうとする場合	1			
		取が右手に短刀を持って突きかかるのを受がかわし、二ヶ条に取ろうとする場合	3			
	裏手 三ヶ条	取が右手で打ちかかるのを受が右手で受け、左手で三ヶ条に取ろうとする場合	5	6		
		取が右手で打ちかかるのを受が右手で受け、左手で取の背後に三ヶ条に取り、右手で取の顔を打ちにくる場合	1			
	裏手 徒手対扇、煙管	取が右手で、扇か煙管を持つ受の右手首を握り、受が扇か煙管を返して取の手にかけ、両手で十字型に手首を極める場合	1	1		
	裏手 短刀対徒手	取が短刀を右手に持って打ちかかるのを受がかわして左手で取の右腕を掴み上げ、右手で取の右手首を取り引き下して押さえつける場合	3	12		13 (1.2)
	裏手 短刀対徒手	取が短刀を逆に持ち振り上げて突こうとする時、受が左手で取の肘の上を掴み、右手で取の手首を取り引き下そうするとき	5			
裏手 太刀対徒手	取が太刀を持ち切り付けるのを受がかわし、取の刀を奪おうとする場合	2				
裏手 太刀対徒手	取が太刀を持ち受の頭上を打ちかかるのを、受が左側にかわし左手で打ち下す場合	1	1			
裏手 銃剣対徒手	取が銃剣を持ち突きかかるのを受がかわし、左手を銃身に掛ける場合	1				

本表は内容に基づいて筆者作成。表の中の()内の数字は『坤』全体(1097手)の中で占める割合(%)を示す。

「掴む」、「握る」等の動作は全て「取る」で統一した。

表 5 『規範合気道』より『坤』と共通の格闘形態

格闘形態			技術名称	技術数	計		
組んで対する	後両手首取り	受が取の背後に回って取の両手首を取る場合	後ろ両手首取り入身投げ	1	17	17 (27.9)	61
			後ろ両手首取り四方投げ(表)(裏)	2			
			後ろ両手首取り回転投げ	1			
			後ろ両手首取り小手返し	1			
			後ろ両手首取り第一教(表)(裏)	2			
			後ろ両手首取り第二教(表)(裏)	2			
			後ろ両手首取り第三教(表)(裏)	2			
			後ろ両手首取り第四教(表)(裏)	2			
			後ろ両手首取り腰投げ(I)(II)	2			
			後ろ両手首取り十字絡み	1			
			後ろ両手首取り呼吸投げ	1			
	後両肘取り	受が取の背後に回って取の両肘を取る場合	後両肘取り第三教(表)(裏)	2	2	2(3.3)	
	後両肩取り	受が取の背後に回って取の両肩を取る場合	後ろ両肩取り入身投げ	1	11	11 (18.0)	
			後ろ両肩取り四方投げ 表	1			
			後ろ両肩取り合気落とし	1			
			後ろ両肩取り第一教(表)(裏)	2			
			後ろ両肩取り第二教(表)(裏)	2			
			後ろ両肩取り第三教(表)(裏)	2			
			後ろ両肩取り第四教(表)(裏)	2			
後襟取り	受が取の背後に回って左手で取の後襟を取る場合	後襟取り第一教(表)(裏)	2	3	3 (4.9)		
		後襟取り肘極め	1				
後襟取り、手首取り	受が取りの背後に回って右手で取の右手首を取り、左手で背後から左肩を越え右前襟を取り、咽喉を絞める場合	後ろ首締め小手返し	1	5	5 (8.2)		
		後ろ首締め第三教(表)(裏)	2				
		後ろ首締め第四教(表)(裏)	2				
対二人	二人の受を同時に相手にする場合	二人取り(呼吸法)	1	4	4 (6.6)		
		二人取り(四方投げ)	1				
		二人取り(第二教)	1				
		二人取り(呼吸投げ)	1				
離れて対する	徒手対短刀	受が短刀を持つ場合	短刀取り(横面打ち第五教)(表)(裏)	2	6	8 (13.1)	
			短刀取り(横面打ち四方投げ)	1			
			短刀取り(突き腕伸ばし)	1			
			短刀取り(突き小手返し)	1			
			短刀取り(突き肘極め)	1			
		同上	短刀取り(座技正面打ち第五教)(表)(裏)	2			2
	徒手対太刀	受が太刀を持つ場合	太刀取り(入身投げ)	1	6	6 (9.8)	
			太刀取り(四方投げ)	1			
			太刀取り(小手返し)	1			
			太刀取り(肘極め)	1			
			太刀取り(呼吸投げ)(I)(II)	2			
	徒手対杖	受が杖を持ち、突いてくる場合	杖取り(入身投げ)	1	5	5 (8.2)	
			杖取り(四方投げ)	1			
杖取り(小手返し)			1				
杖取り(十字絡み)			1				
杖取り(肘極め)			1				

本表は内容に基づいて筆者作成。表の中の()内の数字は『基本篇・応用編』中の『坤』と同様の格闘形態の技術(61手)の中の割合(%)を示す。

「掴む」、「握る」等の動作は全て「取る」で統一した。

表中の「格闘形態」欄の塗りつぶしは以下の通りとする。

立技
座り技

2. 技術的特徴

ここでは『坤』の技術的な特徴を概観する。まず『乾』と同じく、大東流の技術的影響がみられる。『坤』には『乾』のように技術としての合気について個別に論じていないが、柔道對抗技には「對柔道の呼吸投その他数種」(竹下, 1931b, p.199)とあり、先述した合気投げの一種である呼吸投げが載せられている。また、大東流の技術の名称である「二ヶ条」(57 例)、「三ヶ条」(96 例)、「四ヶ条」(14 例)、「五ヶ条」(9 例)がそれぞれみられる。一ヶ条はみられないものの、五ヶ条に関しては「五ヶ条にとり」、「五ヶ条につかみ」、「五ヶ条式につかみ」などあり、特定の技術の名称として用いていた。

次に、『乾』にみられた他流派の記述を、『坤』でも検討したい。受、取が互いに太刀を持つ場合の技術には、「柳生流の如く右に体をかはし彼の打ち下す刀を打つ如く受け」と柳生流の名称が一例のみ確認できる。『乾』のように両手を交差して相手の攻撃を受けるのではなく、相手の太刀を交わして打ち下すように受けとある。『坤』では他流派の名称はこの一例のみみられるのみで、「陰陽の構」や「真影流」といった名称もみられなかった。こうした他流派の名称が『乾』、『坤』合わせて9例(全体の 0.3%)ということを見ると、両史料における武術は大東流の影響が最も強いということがいえる³⁶。

『坤』に収録されている技術にも、実戦性・殺傷性がみられる。例えば、相手に「激突」、「激しく打つ」、「激衝」あるいは「激打」して倒すなどという表現が『坤』に11 例みられる。「一撃」で倒すという表現や(5 例)、腕や脚を「折る」という技術もみられるのも同様である。「練習」の際には怪我を伴い「危険」な技術であるため注意を促す記述もみられる(3 例)。

当身について、『乾』の武術論の 3)「力の用ひ方」には一点の力を持続させることで相手の姿勢を崩して倒す種類の当身が論じられていることを確認したが、『坤』には当身で狙うべき人体の急所(咽喉や水月等)が記されている(竹下勇, 1931b, p.176)。合気武術の当身が急所を狙って相手に破壊的衝撃を与えて倒すものと、一点一方向の力で相手を崩して倒すものの二種類があったことが理解される。

また、『坤』の同じ個所には相手の身体の強く握る部位として「手首背」と「手首裏」と記されているが、現代の合気道でも同じ個所を攻める技術が存在する³⁷。

ここで、前章で保留にしていた裏手と記された技術についても確認しておきたい。『乾』にはわずか 4 手しかなかったが、表 4 に示されているように『坤』には 101 手(『坤』全体の 10%弱)の裏手が記されている。格闘形態をみても、組んで対する技術と離れて対する技術の割合はほぼ同じであり、取からの攻撃で始まる攻防が記されている。合気武術においては、先手をとって攻撃することも重要な要件だったものと考えられる。

また、組んで対する裏手の技術には、「二ヶ条裏手」、「三ヶ条裏手」、「四ヶ条裏手」が合わせて 39 手(裏手全体の 40%弱)みられる。つまり、植芝は合気武術に対処可能な技術も竹下に指導していたのである。植芝が合気武術の技術を他人にみせることを戒めていたことは先述したが、相手が合気武術を研究していたとしてもそれに対応可能な技術を植芝が工夫していたものと考えられる。

さらに、表 4 にもあるが、「裏手の裏手」と記した 2 つの格闘形態の技術が 4 手存在している。これらはいずれも受の攻撃で始まり、取の防御と反撃、受が何らかの反応をした際に施す取の技術のことで、決まった動作を反復する形稽古というよりも、決まった手順でわざを掛け合う空手の約束組手に近いものと考えられる。裏手の裏手の数は『坤』全体では極めて少数だが、当時の植芝の指導が単なる画一的な形稽古の反復ではなかったことをうかがわせるものである。

3. 技術の中にみる竹下の武道論

『坤』には合気武術の武術論がまとまって記されていないことは先述したが、技術の説明の中で竹下が注を付しているところが何箇所かある。以下では、それらから同武術論を検討していきたい。

まず、背後からの攻撃についてみていきたい。『坤』には背後から抱きつかれる後抱え取りの技術が 45 手あるが、その 42 番目の技術に以下の注がある。

(注意) 最初背後に敵が近付きたるとき直に右(左)手刀にて打拂ふべきなり 組付かるまでほんやりし居るは不覚なりと知るべし 即ち右(左)り振り向きつつ右(左)て刀にて打ち拂ふべきなり(竹下, 1931b, p.20)

背後から抱きつかれるというのは一対一の真剣勝負においてはありえない状況であり、背後に敵が近付い

た時点ですぐに当身で対処しなければならないということをお教えている³⁸。

次に、武器を用いた際の心構えについて試みる。『坤』121 から 122 頁には「大刀打の秘法(背後より近づく敵に對し)」という背後から迫る相手に太刀で対処する心構えが 3 点説かれている。相手の気配を察した時点で先を取って相手を倒すまで打ち込むこと、打ち込む際は全力を込めること、最初の一撃が最も重要であるが、それで油断してしまわないことの 3 点である。いずれも実戦を意識した心構えである³⁹。

最後に、多人数の相手に対処する際の心構えについて試みる。取が一人で複数の相手を次々と投げ、抑えていくというのは現代の大東流や合気道の演武会でも上級者が披露している。竹下は 4 人の受を同時に相手にする場合において、「実際の場合には決して数人を我に同時にかからしむ様な油断あるべからず」(竹下, 1931b, p.145)とまず実戦で複数の相手から同時に攻められるような油断をすべきでないと言っている。そして、近づく相手から「個々に一人づつ」、「右手刀左手刀にて手当り次第打ち倒すべき」で、その際に「同時に多数に對抗することなく」、複数の相手と自分の位置関係に気を付けなければならないという。この注意から、竹下は多人数を同時に相手にすることは少なくとも実戦的ではないと考えていたことがわかる。一人で多人数を同時に相手にする技術は、複数の相手でも一人の相手と同じように身体を無理なく合理的に動かし、正しくわざを用いることができるかを練習するためだと考えられる⁴⁰。

以上、『坤』の技術から垣間みられる合気武術の武術論を検討した。油断を戒め、真剣かつ全力でわざを施すという実戦を強く意識すべきということが共通の注意点であったが、これらは前章の『乾』で検討したことと共通するものである。

V. まとめ

本研究は、合気道の基盤形成期における技術的特徴を『乾』、『坤』の内容から明らかにすることを目的としていたが、以下に明らかになった知見と今後の課題を示す。

植芝の武術を熱心に修行し、その普及に多大な貢献をした竹下勇が記録した『乾』(技術数 1634 手)、

『坤』(技術数 1097 手)2 冊の覚書には、植芝の合気武術の技法が記録されている。

『乾』には 48、『坤』には 108 の格闘形態を想定した合気武術の技術が記録されており、いずれも組んだ格闘形態がそれぞれの 60%を超えて想定されていた。『坤』には急所部分への当身や相手の身体の握るべき部位について言及があったが、その他にも両史料に掲載された技術は実戦性・殺傷性を持つものが多い。また、裏手と呼ばれる 105 手の技術の存在は、植芝が画一的な形稽古のみを指導していなかったこと、自身の合気武術に対処する技術をも考案していたことを示すものである。

それらは他流派の影響を若干認めつつも、大東流の技術的影響がみられた。相手を崩す技術の総称としての名辞「合気」の存在や、大東流の技術の名称である二から五「ヶ条」、技術体系の総称としての「一ヶ条」などがその証左である。特に技術としての合気は、練習により到達できる段階が異なると竹下は認識しており、これは現在の大東流の指導者達にも通底する合気の捉え方である。

当時の植芝の下には多くの武道経験者が入門者・挑戦者として訪れており⁴¹、自身の武術を広めるために他武道の挑戦者を研究することは、武道家・植芝にとって必須であったことは想像に難くない。講道館柔道を創始した嘉納治五郎がアカデミックな方法で柔道を創出し、体育としての側面を強調しながら普及していったのに対し、当時の植芝は地方から出て来た一武道家に過ぎなかった。植芝の合気武術を広める一番の方法は、その実用性を証明すること、つまり必要とあらば実際に立ち合い勝利することだった⁴²。『乾』、『坤』にみられる多様な格闘形態はいかなる場合においても勝利するための植芝の工夫の痕跡であり、『坤』の柔道対抗技はその典型例である。

こうした合気武術の技術を支える武術論は、主に『乾』の冒頭部に記されており、技術的な面と精神的な面で論じられている。技術的な面について、合気武術で力を用いる際には、地球の重力に逆らわない方向に用いること、力を分散させずに一方向に集中させ続けることが重要である。それを技術として端的に示すのが、一点一方向の力によって相手の姿勢を崩し、倒す当身技である。同時に、後の合気道指導者たちに「呼吸力」や「統一力」などの名で継承された、呼吸と動きを合わ

せることによって生じる一種の集中力が重んじられていた。

次に精神的な面について、合気武術を学ぶには他流派と比較研究せず、師の教えに対して素直に学ぶ姿勢と反復練習が必要である。習得した技術は正当防衛以外に悪用せず、他人に合気武術の技術のみせてはならない。そして、日常生活全般に渡って油断を戒め、精神の力を軽視しなかった。そして、最大の練習成果を発揮するためにも、日々の健康管理にも注意を払っていた。これらはいずれも、真剣勝負の場で確実に勝利するためのものであった。

『乾』、『坤』が執筆された時期は、嘉納治五郎が自身の講道館柔道に行き詰まりを感じ、新たな方向性を模索していた時期でもあった⁴³。昭和5(1930)年、植芝の道場を訪れ演武を見学した嘉納は、植芝の合気武術を「理想の武道、正真正銘の柔道」と称賛したといわれている。『乾』、『坤』が記録する合気武術は、嘉納の理想の柔道の具体的な姿を具体的に考察できる点においても、大きな意義を持つといえる。

今後の課題として、まず、竹下が植芝の合気武術をどの程度修行していたのか、調査する必要がある。『乾』、『坤』に記された技術数は多いが、その根幹となる大東流合気柔術をどの段階まで竹下が学んでいたか把握することで、両史料の技術的特徴を大東流の技術体系の中で位置付けることが可能になる。同時に、竹下の他武道の修行歴も調査する必要があるだろう。『乾』、『坤』に若干みられた他流派の記述が、植芝の教えをそのまま記録したものであるのか、他流派を修行した竹下の解釈によるものなのか明らかにするからだ。こうした課題は、竹下の遺した武道関係文書を渉猟していくことで明らかになるだろう。

次に、『乾』、『坤』の具体的な技術の分析も必要である。そのためには、今回使用した富木の格闘形態の分析枠組みの見直しや、状況に応じたより適切な枠組みを工夫することも必要になるだろう。同時に、植芝が修行した大東流合気柔術や柳生心眼流柔術、柳生新陰流剣術の理合や技法を理解・習得しておくことも有益である。両史料はあくまでも技術書であり、最低限の知識・経験がなければ解読が困難になるからだ⁴⁴。以上の課題を解決していくことで、近代以降の柔術研究にこれまで不足気味であった技術史的なアプローチが可能になるだろう。

謝辞

本研究に際しては、文部科学省科学研究費補助金(平成20年度～平成22年度、研究代表者:志々田文明、基盤研究(C)、課題番号80196378)の助成を受けた。

竹下勇の史料の提供を頂いた志々田文明教授、竹下勇の史料の提供及び大東流合気柔術について貴重な助言を多数頂いた近藤勝之氏に深く御礼申し上げます。

引用参考文献

- ・合気ニュース編(2002改訂版/1992)改訂版 武田惣角と大東流合気柔術, 合気ニュース, 神奈川.
- ・合気ニュース編(2006a)決定版 植芝盛平と合気道 I, 合気ニュース, 神奈川.
- ・合気ニュース編(2006b)決定版 植芝盛平と合気道 II, 合気ニュース, 神奈川.
- ・大東流合気武道東京総支部(1989)大東流合気武道東京総支部二十周年記念, 大東流合気武道東京総支部, 東京.
- ・月刊秘伝編集部編(2009)開祖の横顔:14人の直弟子が語る合気道創始者・植芝盛平の言葉と姿, BABジャパン, 東京.
- ・波多野勝他編(1998)海軍の外交官竹下勇日記, 芙蓉書房出版, 東京.
- ・市川安司・遠藤哲夫(1967)新釈漢文大系第8巻 莊子(下), 明治書院, 東京.
- ・加来耕三(2008)戦後合気道 群雄伝:世界の合気道を創った男たち, 出版芸術社, 東京.
- ・嘉納治五郎(1889)柔道一斑並ニ其教育上ノ価値, 大日本教育会雑誌, 12, 宣文堂書店, 東京, pp.446-481.
- ・嘉納治五郎(1992)新装版 嘉納治五郎著作集 第二巻, 五月書房, 東京.
- ・公田連太郎・大場彌平(1936)兵法全集第四巻 司馬法, 中央公論社, 東京.
- ・工藤龍太(2013)合気道における合気の意味の歴史的研究, 早稲田大学出版部, 東京.
- ・工藤龍太・志々田文明(2010)合気道における合気の意味:植芝盛平とその弟子たちの言説を中心に, 体育学研究, 55(2), pp.453-469.

- ・ 松田隆智(2000)復刻版 秘伝日本柔術, 壮神社, 埼玉.
- ・ 村山輝志ほか(1983)柔術の技法と柔道, 京都教育大学紀要 63, pp.141-150.
- ・ 永木耕介(2008)嘉納治五郎が求めた「武術としての柔道」:柔術との連続性と海外普及, スポーツ人類学研究, 10・11, pp.1-17.
- ・ パイエ由美子(2014)創成期における植芝合気道思想, 同志社大学日本語・日本文化研究, 12, pp.131-161.
- ・ 佐藤忠之・志々田文明(2008)富木謙治の合気道:基本から乱取りへ, BAB ジャパン, 東京.
- ・ 志々田文明(1992)「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正 15 年前後の植芝盛平—合気道の形成過程の研究(1)—, 武道学研究, 25(2), pp.1-12.
- ・ 志々田文明(1997)合気道基本概念の検討と「武」の多様性, 平成8年度(財)水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書 日本スポーツ史における「武」の問題:技法としての武・表現としての武, pp.37-54.
- ・ 志々田文明・成山哲郎(1985)合気道教室, 大修館書店, 東京.
- ・ 砂泊兼基(1981)武の真人:合気道開祖植芝盛平伝, たま出版, 東京.
- ・ 高橋賢(2007)佐川幸義先生伝 大東流合気の実, 福昌堂, 東京.
- ・ 竹下勇(1931a)乾(近藤勝之氏所蔵複写史料).
- ・ 竹下勇(1931b)坤(近藤勝之氏所蔵複写史料).
- ・ 竹下勇ノート復刻委員会編(2007), 合気術秘伝:乾之巻・坤之巻合本(自費出版).
- ・ 富木謙治(1942)柔道に於ける離隔態勢の技の体系的的研究:柔道原理と合気武道の技法, 建国大学研究院, 新京.
- ・ 富木謙治(1958)合気道入門, ベースボールマガジン社, 東京.
- ・ 富木謙治(1991)武道論, 大修館書店, 東京.
- ・ 植芝吉祥丸著・植芝守央改訂版監(1999 改訂版/1977)合気道開祖植芝盛平伝(改訂版), 出版芸術社, 東京.
- ・ 植芝守央(2002 改訂版/2001), 規範合気道 応用編, 出版芸術社, 東京.
- ・ 植芝守央(2003 改訂版/1997), 規範合気道 基本編, 出版芸術社, 東京.
- ・ Shishida, Fumiaki(2008)Counter Techniques Against Judo - the Process of Forming Aikido Circa 1930, Archives of Budo 4, pp.4-8.
- ・ Shishida, Fumiaki(2010)Judo's techniques performed from a distance: The origin of Jigoro Kano's concept and its actualization by Kenji Tomiki, Archives of Budo, Vol.6(4):165-172.
- ・ Shishida, Fumiaki(2011)Jigoro Kano's pursuit of ideal judo and its succession: Judo's techniques performed from a distance, "Ido Movement for Culture. Journal of Martial Arts Anthropology" Vol. XI(1):42-48.
- ・ Shishida, Fumiaki(2012)A Judo that Incorporates Kendo: Jigoro Kano's Ideas and Their Theoretical Development, Archives of Budo, Vol.8(4):225-233.

本文注

1 大東流柔術は1922年に大東流「合気」柔術へ流派名が改称されるが、その理由ははっきりしていない。本研究では、植芝が1915年に大東流柔術を修行し始め、大東流合気柔術となった以降も修行を継続していたという事実をふまえて、植芝が1922年以前に修行した武術を大東流柔術(あるいは大東流)とする。

2 筆者・志々田(2010, p.454)は、植芝が大東流柔術の修行を開始した1915年以降相生流合気柔術への名称変更がなされる1928年までを大東流柔術期、1928年以降財団法人皇武会の設立及び高弟への初の段位発行がなされる1940年までを基盤形成期、1940年以降盛平の没する1969年までを基盤確立期、そ

れ以降現在までを流派分立期と合気道史を区分した。本研究でもこの時期区分を用いる。

3 竹下の生涯については波多野勝他(1998, pp.8-97)による「竹下勇小伝」を参照。なお、同書によれば竹下が大將に昇進するのは大正12(1923)年、植芝の武術を稽古し始める同14年には軍事参議官に任命され、本研究で扱う『乾』、『坤』を執筆する直前の昭和4(1929)年には予備役に編入されている。

4 竹下勇術道関係文書に関しては、大東流合気武術東京総支部(1989, pp.131-139)を参照。

5 志々田による科学研究費補助金研究成果報告書(平成 23 年 5 月 12 日作成)参照。

(<https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2010/seika/jsps/32689/20500530seika.pdf>)

6 合気道史について詳細な叙述がある一般書籍については既に志々田(1992, pp.3-4)が検討している。それに加えると、植芝吉祥丸著(1995)『合気道一路:戦後合気道発展への風と雲』は、創始者植芝盛平の後継者となった著者による太平洋戦争敗戦後の合気道の発展史が描かれている。合気道史の数少ない学術研究としては、志々田(1992)が1926年頃の植芝の動向を調査している。筆者・志々田(2010)、筆者(2013)は合気道における合気概念の変遷史を調査している。パイエ(2014)は、植芝が信仰していた大本教の、植芝への思想的影響を論じている。また、一般向けの合気道の実技書の中の一部ではあるが、志々田(1985, pp.9-31)の通史的解説も有益である。

7 志々田(1997, p.39)

8 植芝の弟子達へのインタビューとしては、合気ニュース編(2006a, 2006b)や月刊秘伝編集部編(2009)のものが挙げられる。

9 柔術の技術を各流派の伝書を用いて分析した研究として、村山ほか(1983)の研究が挙げられる。村山らは、竹内流、神道天真流、天神真楊流、真蔭流の技術を分析しているが、その数は恐らく伝書に記されていたのであろう 299 手に留まる。後述するように『乾』、『坤』には 2000 を超える技術が掲載されており、この数と単純に比較しても、『乾』、『坤』がいかに多くの大東流の技術を分析できる史料であるかは明らかである。

10 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号:20500530 / 研究代表者:志々田 文明)の助成を受けて『乾』、『坤』の解説、活字化がなされた。筆者も研究協力者としてその作業に関わった。

11 例①同書 p.3 の最上段に「乾」とあるが、「坤」が正しい。② p.28 の通し番号 16 の以下の記述。「10ト同ジク彼ヲソノ■正面ニ背後ニ引倒ス[筆者注:「■」は判読不明の意]」と判読不明の一字は、「我」と読む。③p.116 の通し番号 5 にある以下の記述。「左足ト彼ノ前面ヲ■渡ニ横切り進出シ」は、「左足ト彼ノ前面ヲ活澁ニ横切り進出シ」と読む。

12 植芝と大東流の師である武田惣角(1859-1943)の師弟関係は大正 4(1915)年より始まっている。竹下の稽古日記を調査した志々田(1992, p.6)によれば、竹下が当初植芝から習い始めた

武術は大東流合気柔術であり、昭和 3(1928)年植芝の武術が「相生流合気柔術」を名乗り、事実上大東流から独立を宣言している(同 4 年 6 月より「合気武術」と呼称)。しかしその後も、昭和 6(1931)年まで両者の師弟関係は確認されている。プラニン(合気ニュース編, 2002 改訂版/1992, p.38)によれば、植芝は武田の教授代理として、自分の弟子に 1930 年代の半ば頃まで武田の名を記した大東流の目録を授与している。こうした大東流との関わりが指摘される一方で、植芝の弟子たちの間では大東流はあまり植芝への影響が無かったと主張する者もある。例えば、植芝吉祥丸は著書の中で、植芝にとつての武田惣角を「武道の目を開いていただいた」ものの合気道の創始にはそれほど影響が無かったという立場を取っている(植芝吉祥丸著・植芝守央改訂版監, 1999 改訂版/1977, p.94)。

13 植芝が大東流から相生流合気柔術と名称を変更して大東流からの独立を図って以降、筆者(2013, pp.182-184)が明らかにしたように、植芝の独立を支援した竹下自身は大東流合気柔術の修行を続け、昭和 10(1935)年には「大東流(合気形)」として演武会にも出場している。したがって、『乾』、『坤』の著者である竹下はあくまで自身の技法を大東流と認識していたと考えられるが、後述するように『乾』では植芝から習った武術を「合気武術」と記している。竹下の日記を調査した志々田(1992, p.6)によれば、竹下日記において「合気武術」の名称が確認できるのが昭和 4(1929)年 6 月 14 日の「合気武術懇話会」においてである。また、筆者(2013, pp.182-183)によれば、竹下は「大東流合気柔術」と「合気武道」の講習会を昭和 6(1931)年に開催している。このように、大東流、合気武術、合気武道は 6 年ほどの間に用いられているが、その名称の変遷については本研究の課題ではないため、以下では『乾』、『坤』に記された武術を「合気武術」と呼ぶこととする。

14 武藤氏から武道の史料の扱い方について親しく指導・情報提供を受けていた近藤氏は、『乾』、『坤』が大東流の史料であることから半年ほど借り、その際複写史料化したという。筆者による近藤氏への聞き取り調査(2014 年 3 月 31 日実施)。筆者は、武藤氏より志々田氏の下へ譲渡された『乾』、『坤』の複写史料を実見した後、近藤氏の作成した複写史料の『乾』、『坤』も参照した。

15 この項目の直前には、「□[判読不能]カナレバナル程有効ナリ」とある。この判読不能の箇所には、何か文字が書かれていたと思われる形跡があったが、近藤氏所蔵の複写史料では、その文字はほぼ消えている状態であった。

16 地球の万有引力と、自転による遠心力の合力である重力のことを述べていると考えられる。

17 Shishida (2008, pp.5-6)は、柔道對抗技 147 手の内、14 手の「引落す」と記された技術が存在することから、植芝の技法にみられる起倒流柔術の影響を指摘している。

18 こうした竹下の精神主義が、合気武術の師である植芝の影響であると即断するのは早計だろう。一般的に合理主義者として理解される講道館柔道創始者の嘉納治五郎は、大正 4 年から 5 年にかけて雑誌「柔道」に掲載された「講道館柔道概説」の中で「己を捨てる事」という一項を設け説明している。そこでは、勝負において自己を捨てる覚悟を持つことで恐怖心がなくなり、攻撃に全力を注ぐことができることが説かれている。また、嘉納は「世の中の万事がそんなもの」であり、精神主義が決して武道だけに限定されるものではないことも説いている。勝負という極めて相対的なものを武道が持つ以上、こうした精神的な面を無視して武道を論じることは嘉納にもできなかったものと考えられる(嘉納治五郎, 1992, pp.45-46)。

19 望月は、植芝に丁寧に習ったことはなく、いちばん手のかからない弟子だと言われたという。「見ていてわかってしまうんです。やっぱり他の武道をいろいろやっていたからですね。」と述べている(合気ニュース編, 2006a, p.102)。

20 満洲の建国大学で植芝の門に入った奥村繁信(1922-2008)は、植芝から「技は全部忘れろ」と指導されており、その意味を叱咤に身体が動くようになるまで稽古をしなければならぬということと解釈している(合気ニュース編, 2006b, pp.16-18)。

21 立っている相手を倒す場合に、どの部位に打ち込めば最小限の力で効率的にその目的を達成できるかという問題に、富木(1958, p.101)は相手の姿勢の変化により様々な場合が考えられるものの、「相手の顔面に力を加えて後方に倒すこと」としている。ここで挙げられている 4 例中 3 例に顔面への当身が用いられていることから、それは理解できる。

22 力を加えて、人間の体を崩す場合に、「からだ全体の移動力、すなわち、運足の早さ」によって行なうときに効果が大きいと富木(1991, p.161)は指摘する。

23 富木から学生時代に薫陶を受けた佐藤忠之氏は、当身技で相手の顎を押し上げることにより、相手が移動力を失い倒れやすくなると述べている(佐藤・志々田, 2008, p.116)。

24 『乾』に先立って存在した国語辞典『辞林』(1923)、『大日本国語辞典 2 巻』(1928)には同様の解説がみられる。なお、その他の意味として、「天地にみなぎっている至公・至大・至正な天地の気」(広辞苑第六版)と同様の意味がある。

25 「靈力」は『広辞苑第六版』(2008)には「不思議な力・精神力」とある。しかし、『乾』が執筆された近い時期に出ている『言海』(1904)や『辞林』(1923)等の初期の国語辞典には「靈力」という用例がない。「靈」については、「魂」や「靈魂」と「奇しく尊きこと」という解説がなされており、靈力を不思議な力・精神力ととらえることは可能である。

26 筆者(2013, pp.137-337)は、先述した合気道史の時期区分において、植芝盛平とその弟子たちが用いた合気の意味の変遷過程を調査している。大東流柔術期においては植芝が修行した大東流柔術の技術的意味で用いられていた合気が、基盤形成期になると植芝が信仰した大本教の影響を受けて「愛」や「和合」といった精神的な意味を持つようになり、基盤確立期以降はそれがより顕著になっていく。

27 富木(1942, pp.35-36)は、武術の技術の根幹を「いかにして『先』をとるか」としたうえで、「先々の先」、「先」、「後の先」の三種に分類した。富木によれば「後の先」とは、「敵の心の動きによって未発にこれを知るのではないが、敵の動作の片鱗を認めて直にこれに乗じて攻撃に出る場合」をいい、「敵の攻撃のまさに我に及ばんとする一刹那にこれを避け、敵の動作の切目と体の崩れに乗じて反撃してこれを制する」ことをいう。

28 1933 年に植芝に入門した白田林二郎(1912-1993)によれば、植芝の道場でのわざの説明はまず神の名前が出てきて、その働きについて述べるというものだったという(合気ニュース編, 2006a, p.131)。

29 一例として、筆者(2013, pp.187-192)が示した表 3-2 の通し番号 10「前面より右手にて我左袖を把らんとするとき、格闘形態詳細の 26「右手にて我左袖を把るとき(若くは把らんとするとき)」は互いに立った状態の技術を 53 手記しているが、その 11 番目の技術は「對坐」とあり、お互いが正座した状態の技術になっている。しかも、どこまでが互いに座った状態の技術なのかを明記していないため、武道未経験者には判断が難しい。

30 『規範合気道』基本編には、植芝吉祥丸が 1997 年に書いた前書きに「無数にあると言える合気道の技の中から、規範となるべき技を選び出し」た旨が記されており、現代の合気道の標準的な技術体系を示すものとして同書を位置づけることが可能である(植芝守央, 2003 改訂版/1997, p. 9)。もちろん、『規範合気道』は本文中にもあるように「教科書」的な存在であり、収録しきれない膨大な技術が合気会に存在することは明らかである。

31 合気会では、現在これらを「第一教」、「第二教」…というように、「ヶ条」ではなく「教」という名称で表現・指導している。植芝の戦前の内弟子である塩田剛三の創設した養神館では、「ヶ条」の名称を用い続けている。合気会では第一教から第五教までを、それぞれ「腕抑え」、「小手回し」、「小手ひねり」、「手首抑え」、「腕伸ばし」と定義している(植芝守央, 2003 改訂版/1997)

32 近藤氏によれば、大東流の秘伝目録では一カ条 30 本、二カ条 30 本、三カ条 30 本、四カ条 15 本、五カ条 13 本で構成されている(合気ニュース編, 2002 改訂版/1992, pp.140-141)。

33 現在、近藤氏の指導する大東流では一カ条立合(立技のこと)10 手の最後の技術が、四方投である。

34 一例として『規範合気道』には、合気道で乱取りはしないのかという合気道初心者からの質問に対して、「合気道は自分から攻撃するということがありません。形の上では、相手から攻撃されてそれを捌くのが合気道の動きです。ですから、合気道を使うもの同士の乱取りはなかなか成立しません」という答えが掲載されている(植芝守央, 2003 改訂版/1997, p.18)。

35 合気会が乱取りを認めないのは先述したが、同じく『規範合気道』には、なぜ合気道では試合をしないのかという質問に対し、現代では他人との武術の勝敗にこだわることに意味がないこと、「合気道には『相手を倒す』という思想がない」とためと回答されている。相手を倒す思想がないというのは、創始者植芝の教えを継承したもののだが、こうした思想の影響下においては、当然他武道に対処する技術への関心も育ちにくいだろう(植芝守央, 2003 改訂版/1997, p.14)。

36 植芝は明治 38 (1905) 年から同 41 年までの従軍期間、柳生心眼流柔術を修行し、免許を受けたといわれている(植芝吉祥丸著・植芝守央改訂版監, 1999 改訂版/1977, pp.63-66)。また、植芝は柳生新陰流剣術も学んだことがあるといわれる。『乾』、『坤』が執筆される時期、植芝は柳生新陰流第十九世柳生巖周の高弟下條小三郎と皇武館開設前後から交流があったとされる(志々田, 1985, 17-18)。このように『乾』、『坤』は植芝の武術修行歴の解明に、技術史的なアプローチが可能であることを示している。しかし、両史料にみられる他流派の技術が竹下の視点を通して記述されたものであることには留意しておくべきだろう。また、両史料に記されている技術が、武田惣角が植芝に伝えた大東流合気柔術をそのまま記したものであるということではできないだろう。両史料には既に確認したように他流派の影響もみられ、純粋な大東流の技術を記したのとは言い難い。大東流「植芝派」というような、大東流の一形態と理解しておくのがいいだろう。

37 合気会には、第四教(手首抑え)という技術が現在も存在する。第四教とは「手首の構造上の弱点を攻めるもので、表技は脈拍部、裏技は橈骨部を圧して抑え、極めていく」技術である(植芝守央, 2003 改訂版/1997, p.150)。

38 同様の注意は、受が取を送襟紋にする場合の 5 番目の技術にもある。そこでは「始め右の如く背后より取られたる瞬間、右肘又は右手刀にて當身をあて后頭部にて彼の顔を打つことを忘るべからず。實際に於ては武芸者たる者が斯の如く組み付かるまでぼんやりすべきにあらず。『来たな』と感づくか又は彼の手が我に觸るとき右にふり向き右手刀にて打拂ふか、又は彼の左手が我左腕下に入るか否や左手刀にて切り下して投げ飛ばすべきなり。」(竹下, 1931b, p.68. 句読点筆者)とある。ここでも当身の重要性が説かれている。

39 実戦を意識した武器の使用法は、受、取が互いに銃槍を持つ場合でも以下の注意が述べられている。「槍、銃槍にて突込む時は初撃に迅速に強く激しく突入れ直に引きて第二突撃に備へる。即ち突くも速く強く引も又早くして決して寸隙を作るべからず。」(句読点筆者)ここでも初撃に全力を込めること、かつ油断してはならないことが述べられている(竹下, 1931b, p.138)。

40 『規範合気道』では「より安定した体捌きと強い呼吸力の養成を目指して鍛練」とある(植芝守央, 2002 改訂版/2001, p.188)。現代の合気道においては、演武会の一科目として観客に披露するためという「みせる」要素もあるだろうが、基本的な練習の目的は『坤』が書かれた時期と変わっていない。

41 植芝吉祥丸(1999 改訂版/1977, pp.204-212)によれば、昭和 6 (1931) 年に建設された皇武館道場には厳重な入門制限にもかかわらず多くの入門者があり、そのほとんどが柔剣道等の武道経験者であった。通称「牛込の地獄道場」と呼ばれるほど激しい稽古が行われたという。

42 佐藤・志々田(2008, p.13)によれば、植芝の古参の弟子の一人である富木謙治は、大学卒業時の柔道四段であったときに植芝のもとを訪れ、最初の稽古が立ち合いであったこと、そこで植芝の技法に翻弄されたことを述懐している。同様の話は、基盤形成期に植芝に入門した他の弟子達も語っている(合気ニュース編, 2006a, pp.172-173, 228-229)。

43 嘉納が求めた理想の柔道とその研究展開、継承については Shishida (2010, 2011, 2012) を参照。また、嘉納が柔道の海外普及を視野に入れて古流柔術を研究、「最も進んだ武術」としての柔道を構想していたことは永木(2008)を参照。

44 富木(1991, p.23)が武道を「世界に類のない独自の技術的
精神的文化」と述べたように、武道が技術的文化である以上、そ
の研究には最低限の経験・知識が必要である。